

卷頭言

依義不依語

仏教文化研究所編集委員

蜷川祥美

『大智度論』に「四依」の教えが説かれています。

應依法不依人。應依義不依語。應依智不依識。應依了義經不依未了義。

(大正二五・一二五上)

とあるように、釈尊が涅槃に入ろうとなさった時に、比丘たちに語った四つの依りどころ、即ち、①「法に依りて人に依らざるべし」、②「義に依りて語に依らざるべし」、③「智に依りて識に依らざるべし」、④「了義經に依りて不了義に依らざるべし」を示したものです。

このうち、②「義に依りて語に依らざるべし」について、

依義者。義中無諍好惡罪福虛實故。語以得義義非語也。如人画像以指指月以示惑者。惑者視指而不視月。人語之言。我以指指月令汝知之。汝何看指而不視月。此亦如是。語爲義指。語非義也。是以故不應依語。

と解説されています。

親鸞聖人は、『顕浄土真実教行証文類』化身土文類に、『大智度論』の当該文を引用されていますので、『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類 (現代語版)』を引用して現代語訳を示しますと、「義に依りて語に依らざるべし」は、

教えの内容を依りどころとし、言葉に依ってはならない

(『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類 (現代語版)』五三一頁)

と訳されており、解説については、以下のように訳されています。

教えの内容を依りどころとするとは、教えの内容に、よいと悪い、罪と功德、嘘とまことなどの違いをいうことはなく、だから言葉は教えの内容を表しているものであって、教えの内容が言葉そのものなのではない。言葉に依って教えの内容に依らないのは、人が月を指さして教えようとするときに、指ばかりを見て月をみないようなものである。その人は《わたしは月を指さして、あなたに月を知ってもらおうとしたのに、あなたは どうして指を見ないのか》というであろう。これと同じである。言葉は教えの内容を指し示すものであって、言葉そのものが教えの内容であるわけではない。このようになわけて言葉に依ってはならないのである。

(『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類 (現代語版)』五三二〜五三三頁)

*大正新修大蔵経所収の『大智度論』と『顕浄土真実教行証文類』の引用文には、若干の文字の違いはありますが、同内容のものであります。

本号の論考には、優れた論義研究が二編寄せられました。「義」を教えの内容と訳すなら、「論義」とは、教えの内容を論ずることです。仏陀の説かれた教説について、その内容を学僧たちが言葉を尽くして論じてきたのです。同じ体系で仏道を歩む者同士の論義と、異なる体系で仏道を歩む者同士の論義には自ずから違いがあり、後者の場合、どちらが真実であるのか争っているかのように見える場合もあります。

しかしながら、仏陀の説かれた教えとは、我執を離れ、他者を救済することを旨とする理想の存在、即ち仏と成るためのものでありましょう。私たちがどのように仏道を歩めば、仏と成ることができるのかといった視点に基づいて、他者の考え方を認めつつも、自らのよりどころとする教えの内容を、より一層深く問うことが論義の本質ではないでしょうか。

私自身も、先哲の残された論義研究をしておりますが、どの論義にも先哲方の真摯な仏道観が表明されています。これらを学ぶことが、自らの仏道観を探るよい機縁となることを願いながら精進したいと考えております。

『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第十八号をお届けします。ご執筆賜りました諸先生方に御礼申し上げますとともに、法義相統の念をもってご高覧いただきますようお願い申し上げます。

平成三十年（二〇一八年）三月三十一日

